

## はじめに

正倉院に多くの宝物が献納されてから既に千二百五十年が過ぎていく。その間に生じたであろう様々な有為転変に影響されてきたはずだが、本来の姿を今日に伝えていることは広く知られている。献納された宝物には官物（永久保存）と資財（消費材）との二様があることが正倉院文書の中に記録されている。そんな献納された多種の宝物の中に多量の香薬がある。それは資財だろうが、今日にその姿を伝えている。

正倉院にあつては献納から三十年後に「香薬」を主として保存調査（曝涼）を行ったことが曝涼帳と通称される記録に残されている。この記事が本書の表題に香薬の語を用いた出発点である。そして献納から五十年後の曝涼帳には庫内の香薬の品質に触れ、多くの香薬は中品であるが上品や下品とする薬物が存在することを記録している。このことは香薬が保存中に変質を示したことを示したことで関心を払ってきた。しかし、献納からほぼ百年を経てからは香薬のことでの調査は行われなかったようである。

その後、昭和期にいたって庫内の薬物の実情調査が繰り返し行われるようになった。当初は「種々薬帳」に記載の薬物の存否や残存量の調査に始まったが、昭和五、六年に中尾万三は庫内の薬物の鑑定に始まる薬物調査を行い、『正倉院宝庫漢薬調査報告』を提出している。そこでは庫内で確認した薬物の保存についての提案をしているが、そこにいたった根拠は何も記していない。それは個々の薬物について外観から実視するだけで理科学情報がほとんどない状況では推断することも困難である。それだけに現在の視点からは理解し難いこと

も多々あるが、示唆に富んだ記事が多い。許可を得て本書第五章に引用紹介した。

正倉院薬物について理科学的な知識(情報)を総合した本格的な調査は昭和二三〜二六年に行われた薬物総合調査(現在は第一次薬物調査と通称)に始まることで、その第二次薬物調査が行われたのは平成六〜七年のことである。その間には四十年余の時間が経過していた。香薬の理科学調査に応用できる機器の技術革新はますます大きく、より高機能となった機器が短時間で相次いで登場しては、それを使うどころか、得られるデータ、情報の解析さえ手に負えなくなっている。筆者が参加したのは第二次調査である。現在ではそれから二十年が経っている。

薬物の調査に際して、正倉院からは各調査員には調査目的として四項目が呈示されている。その四番目に庫内の宝物の保存のことが記されていた。しかし、過去の調査報告書には、保存に関する記事はない。

保存の研究に必要なことは過去の調査結果と比較することである。そのためには比較できるデータを得られる機器であることが望ましい。とのことを拠り所に第二次調査時に応用したのは先端機器ばかりではない。

文化財の調査は材質を知ることから始まると思いきや、第二次調査にあつて筆者が行ったのは香薬の現状(材質)を理化学的に分析し、調査することであつた。本調査の二年間だけでは、保存のことにまで視点は及ばなかつた。その後追加調査の機会を得たことで若干ながら保存を考える上での情報をも得ることができた。調査を行ったのは香薬と称する素材だけである。しかし、そのことだけでも記録しておくべきであると信じて「材質調査から保存へ」を副題として本書を著すこととした。

以上が本書を著した意図で、理系の者には馴染みの横書でなく縦書としたことで、やはりつらい文章になつてしまつたがご寛容のほどお願い致します。

## 凡例

・正倉院宝物である文書、香葉などを記する時その名称（通称を含む）には原則として「」を付した。  
・比較試料とした市場品、文書、時代を異にする物などは名称（通称を含む）のみとした。  
・写真等の図版にあっても、名称に「」を付したものはすべて正倉院宝物である。個々に（正倉院宝物）との記載はしていない。

・図表などは付記がない限り著者の作成によるものである。

・本書に採用した度量衡単位は、右のとおりである。

大 一斤 〓 小 三斤

小 一斤 〓 十六両 〓 二二三グラム

一両 〓 四分 〓 一五グラム

一分 〓 三・七五グラム

（引用した「正倉院文書」類に記された重量が単に「斤」とあるときは小斤のこととした）

目次

はじめに

第一章 香薬とその調査 ..... 3

一 正倉院宝物とは ..... 4

二 正倉院の香薬の調査——保存と利用から—— ..... 12

三 宝物調査の詳細 ..... 35

第二章 香と香材の調査 ..... 53

一 正倉院の香と香材 ..... 55

二 香道具のこと ..... 63

三 香薬等で装飾された調度類 ..... 66

四 庫内の香・香材の調査 ..... 68

沈香及雜塵（北倉二二九） 68

全浅香（北倉四一）と黄熟香（中倉二二五） 77

白檀（北倉二二九「沈香及雜塵」の中） 92

木香（北倉二一八）——附・青木香（北倉二二六）—— 101

丁香（北倉二一九） 107

第三章

薬物の調査

薬物の現状と調査

練り香——正倉院の炭塊（北倉一三五「薬塵」中）—— 131  
 香袋 123  
 裏衣香 123  
 合香（中倉二九「香袋」、中倉八〇「裏衣香」） 122  
 琥碧（北倉一一五） 116  
 薰陸（北倉一二五） 114

麝香（北倉一一四） 147  
 犀角器（北倉五〇） 150  
 阿麻勒（亡佚） 153  
 奄麻羅（北倉一三五「薬塵」の中） 155  
 無食子（北倉八三・北倉一二四の一） 157  
 厚朴（北倉八四） 160  
 桂心（北倉三九・北倉四四） 164  
 人参（北倉一二二） 169  
 大黄（北倉九五） 178  
 臈蜜（北倉九七） 190  
 甘草（北倉九九） 195

胡同律 (北倉一〇二)	203
没食子之属 (北倉一二四)	206
草根木実数種 (北倉一三三)	208
薬塵 (北倉一三五) —— 保存の過程で生じた断片 ——	211
防葵と狼毒 (ともに亡佚か)	217
獣胆 (北倉一三二)	222
その他の薬物	227
附章 ある蘭方医の薬箱に見る保存例	231
一 薬箱とは	233
二 洪庵の薬箱に見る薬物の保存例	242
撮綿 (セメン)	242
将軍 (大黃)	247
甘草	249
桂枝	251
旃那 (センナ)	253
葛根	255
三 幕末の製薬剤に見る保存例	260
四 幕末の大黃製剤ウルユスの分析	269

第四章 宝物を彩るもの——織布・紙に見る——

一 古代の天然色素材	276
二 染色材の調査	281
蘇    芳（北倉一二一）	281
紫    鑛（北倉一二三）	285
茜    根（北倉一三五「葉塵」の中）	289
紫    根（北倉一三五「葉塵」の中）	292
その他の植物性色素料（北倉一三五「葉塵」の中）	294
銀    泥（北倉一〇三）	295
丹    （北倉一四八）	296
朱・辰砂（北倉一三五「葉塵」の中）	297
雄    黄（北倉一一一）	298
密陀僧（亡佚）	301
三 染色材の保存と劣化	303
四 包装材としての布帛	309
五 植物繊維と紙	316

第五章 香薬の材質調査から保存へ

一 正倉の構造	340
二 香薬の収納と包装	346
	336

三	材質調査は保存のため	350
四	庫内の微小生物の調査	352
五	保存への提言例——中尾万三の調査報告から——	356
六	文化財(材)の保存とは	364
七	文化財の理科学調査	367
八	有機素材からなる文化財の材質調査	374
九	素材の劣化とその対策	383
十	調査記録を残す	390
附	地下埋蔵物の発掘と保存例	393

附表 正倉院宝物の特別調査(材質調査)一覽

正倉院香菓とその関連年表

おわりに

索引(人名・書名)

おわりに

筆者は大学において、医薬に関する歴史とともに医薬品の原材料について資源、材質を専攻してきた薬学徒である。大学の四回生として分属した研究室で初めて与えられた課題が狼毒の調査で、同時に与えられた文献が『正倉院薬物』の抜刷であった。調査は素材の素性を明らかにすることは判ったが、方法が判らない。

香薬は原材料を動植鉱物の三界に広く求めてきた。物質としては無機物・有機物を問わず、この地球上のあらゆる物が対象である。だがそのまま使用するのではなく、当初は乾燥するだけでも、より有効性を確保するために各種の加工技術を施してきた。そんな香薬を眼前に呈示されても姿や形だけでは原形に及ぶことはない。

香薬の素材を調査することではあったが、文化材(財)の多くが天産物、それも有機物を素材としていることを知った。個人としての研究対象は当初の領域にとどまらなくなった。その結果、正倉院の香薬類をはじめ、古刹に伝存する香薬、さらには江戸〜明治時代の香薬や関連する各種の文化財の調査に従事してきた。同時に文化財の調査は決して個人の力だけでできることではないことを知った。たとえば、正倉院の両種の御香(蘭奢待と全浅香)をはじめとする香や香材の調査・研究には多くの分野の人々が伝存する貴重な資料の分与を受け、そして自らの経験や様々な情報を教示いただいた。そして自らが行ったのは理化学調査ではあるが、調査機器の進化はめざましく、そこから提供される情報をよくは理解できないことが多かった。幸いなことに多くの専門家からは調査だけでなく、データの解説をも得て調査を進めることができた。深く感謝している。

今後の研究・調査にあっても、あらゆる力を総合的に集結して対処すべきであることを痛感している。

小生にとって財物を理科学的に調査することでの準備期間は短くはなかった。昭和四〇年頃には、大阪羽曳野市内の野中古墳から出土の棺材や兜の装飾材の鑑定などで調査班のお手伝いをしたことがはじまりで、昭和五〇年には中国馬王堆の墳墓から発掘された植物性遺体の調査に関与した。このようにはじまりは地下埋蔵物の調査であった。その後、香葉の調査を進める中で、試料としたのは上方に限らず各地の旧家に伝存する貴重品で地上空間にあつて保存されてきたものであつた。しかし、地上空間に伝存する財物を理科学的に調査した報告は少なく、あつても一、二の財物についてのことであつた。それを覆したのが昭和二三―二六年の本調査と引き続いての二年間の追加調査からなる調査報告書『正倉院薬物』（昭和三〇年）の発刊であつた。

小生が正倉院薬物の実物に向かいあつたのは第二次調査が始まつた時で、それは平成六年秋のことであつた。調査は理科学調査を旨とし、正倉院外の調査員は理科系のみで小生もその一人であつた。正倉院薬物を前にしてもなんなら違和感はないが、墳墓からの発掘物の調査経験にはつながらない。正倉院薬物の調査は考古学の調査とは違う。そこで、遺物の理科学調査の先達でもある濱田耕作（青陵）氏の論著を読み返したとき、その著すところは今なお筆者には新鮮なことでして受けとめることができた。濱田が調査対象とし、念頭にあつたのは無機物からなる出土品であつた。しかし、筆者が向かいあつたのは有機物からなる財物であつた。有機と無機では学術流儀は異なる。有機化学は二〇世紀半ばから進展した学問であつて、一次調査時にはその走りとも言うべき一端が応用されたにすぎない。

小生にとって、保存のことを考えるにいたつた歴史は長い。世界各地の民族薬や薬用植物、その他の関連する資史料の収集を、国内外の各地へ同行を許され薬物の現場でご指導をいただいたのは高橋真太郎、木村康一、木島正夫をはじめとする先輩諸氏のおかげである。正倉院薬物の調査に絞れば、中国各地、東南アジア各地、

シベリア、中央アジア、南太平洋各地での調査経験が大いに役だった。シルクロードは度々訪れているが、何しろ地域が広すぎて、旅行者の限界を感じることはかりである。その中で、木村先生や木島先生の該地域での調査記録や経験談、さらには中尾万三先生が蒐集・所持されてきた資料の一部にしろ御子孫から小生に託されたことは、身の引き締まる思いであった。昭和初期にまで遡ってのことだけに、小生如きがどの程度まで理解できたか、心許ない次第であった。それでも、正倉院の場に立った時、初めての場なのにそのように思えないほどに、強く心に焼き付いていた。

香薬の調査にあつては長年にわたつて多くの先輩諸氏の熱心な指導と協力をいただいた。既に故人となられた方は多い。個人的なことではあるが、大学にあつては主任教官の入院は大学院生の途中で職に就くことを余儀なくされ、ほどなく師を失った。まるで学界の孤児となつたとき、分野を超えた方々の援助や指導があつたからこそ、大学人として過ごすことができた最大の力であつたと感謝している。一分野にとどまらない人々との交流は最大の資産であつた。藤野恒三郎先生は国交回復直後の中国への旅に同行を仰せつけられ、道中で何つた学問を職業とする者の心構えを説かれた。それから四十年を経た今も、私の人生の指針である。その後、歴史と薬学、異なる領域の研究を結びつけ、素材の研究の道を歩むことの大きな障害を取り除いていただいたのも藤野先生であつた。

薬学にあつて、歴史調査の意義だけでなく楽しさを教えていただいたのは、最初にして最後の上司であつた高橋真太郎先生である。学部、大学院のわずか四年の事であつた。素材を見つめ、本草書を読み話され、自らの病身を押して、そのとき中国産薬物の最大の市場であつた香港での薬物事情の調査に帯同を下令され、現場で実物を手に実地指導を受けたことがあつた。その時に受けた本草学・薬物学が小生の研究の基本となつた。先生は三十代にして『明治前日本薬物学史』の執筆者に指名されるほどの知識と考えをお持ちだったのだろう。

が、その時は思いも至らなかったことで、今さらながらお詫びをしている。

小生が四回生の時、高橋先生から与えられた卒業研究のテーマは狼毒の調査であって、正倉院薬物の一つであった。その狼毒はきわめて難解な薬物でしばしば行き詰まっていた。何しろ稀用の薬物だけに試料の収集で難渋していた。ちょうどその頃、東京大学薬学部で大学全体が保有する學術標本を集中して教育研究に資する標本館建設（後に幾度か変遷があったが、現在の東京大学総合博物館に発展）が構想されていた。東大の薬学部は標本館開設に参加の方針を決定したことで、開学以来の薬物標本を整理し鑑定する必要があった。その時、薬物標本の管理を担当されていた柴田承二先生から、小生ごときに鑑定、整理のことで依頼があった。数は多くはないが幕末期に収集された標本に始まる調査は楽しいことであった。その中に小生の研究テーマ、狼毒に関する貴重な標本があった。整理を終え報告書の提出に伺ったとき、狼毒の標本のさらなる調査の許可をお願いした。柴田先生からは、標本は保存するだけでなく活用することが必要、との言を添えて分与していただいたことはまさに望外のことであった。このこともあって狼毒の研究は学位論文の一端を構成するにいたった。第二次調査は、柴田承二（代表）、木島正夫（顧問）両先生の指導のもと調査を進めたが、気がかりは「狼毒」のことが今なお結論として言い切れていないことである。小生の研究生生活は今なおその線から抜け出していない。本書をまとめるに際してはご指導をいただいたすべての先生方の名を挙げて自らの歩みを辿るのが筋であるが、既に故人となられた方も多い。個々の名を挙げることはしないが、心から感謝している旨を記したい。

それらの多くの方々に小生は自らの現状や今後の研究の一端を報告してきたつもりではいたが、その人々から強く勧められ、求められたことは調査の経緯を記録として残すことであった。特に、正倉院薬物は平成六年から第二次調査が行われたにしろ第一次調査から五十年近くが経っていた。

第二次調査が終了した時点で柴田承二代表は、班員各位の報告書をまとめて正倉院事務所に提出され、平成

一〇年には『正倉院紀要』第二〇号に概要を報告された。その間には、調査成果の発表を目的に公開フォーラムも開催した。さらに概要であっても図版を付すことでより詳細な公表となると信じて平成一二年には柴田承二監修、正倉院事務所編集として『図説 正倉院薬物』（中央公論新社）を発刊したことで第二次調査は終えることとした。その後の調査と報告は各調査員の責務となった。

第一次調査の設定課題であった薬物（宝物全体であるが）を保存するという観点からの研究は進まないままであった。そんな時に、大きく心を動かしたのは、古文化財の科学研究の泰斗、山崎一雄先生のご指導であった。先生は無機化学を専攻され、無機素材の文化財を化学調査され、多くの報告をされる一方で、正倉院薬物の第一次調査時には支援研究員の一人として参加されている。『正倉院薬物』への寄稿だけでなく『古文化財の科学』（単著、思文閣出版、昭和六二年）として自らの研究やその関係報告をまとめて刊行されている。山崎先生は戦後には文化財保存修復学会を立ち上げられた。その機関誌には、号数は違えど第一次調査の一端を朝比奈泰彦代表は第四号に、山崎先生は第七号に寄稿・報告されている。山崎先生は重鎮として六十有余年もの長期にわたって学会を引っ張ってこられた。先生は学会でお会いするたびに小生如きに、文化財の保存と調査について話され、有機物の調査のことを質されたことはしばしばであった。第二次調査の調査データや結果などを携帯用パソコンの画面で見ただきながらお話し上げることが、学会の場でお会いした時の常であった。同時に先生の経験談を伺うことは学会参加の楽しみでもあった。最後はいつも、「有機性財物では保存中に内部で何か起こっているはずだが誰も知らない。その視点から調査した対象物は限られていても、現時点で判っていることだけでも公表しておくことは、調査を行った者の責務である。同時に調査班は第一次調査から理科系学者ばかりである。異分野の研究者が理解できるように工夫して欲しい」との重いご教示をいただくことであった。「まとまっていなくてもいい、判ったことだけでもよい。調査研究に参加した者の義務と責務

を忘れないように」と繰り返し叱咤激励された。小生の調査は途中であつて、判らないことだらけであるだけに躊躇する気持ちは今もある。加えて生来の筆無精で時間は経過するばかりであつた。山崎先生とは幽明境を異にしてしまった。悔悟の念ばかりである。

遺漏は多々あるし、訂正されるべきことはそれ以上にあるだろう。お詫びする以外に何も無い。このような経緯に免じ、なにとぞご寛容のほどをお願いする。

なお、最後に本書を作成する中で最も苦勞した事を記して言い訳としたい。

それは、過去の報告を含めて香薬個々の理化学実験の結果やデータの伝え方であつた。本書の意図は「材質調査から保存へ」にある。香薬の変質を知るには実情（材質）調査のデータを横断的に解析する必要があるから、過去の香薬の分析調査結果を再検討する必要があつた。ところが、庫内の沈香やその類はほとんど変質を確認しない希有な例であつた。そのため本書では現状を理科学的に報告した拙稿『正倉院紀要』第二二号の報告を本書の主意にそつて部分的に書き直し、転載することができた。しかし、このような香薬の事例は他にない。

変質を検討する時、千二百年前の財物と現在のものとの時間差を埋める資料が欲しい。それを埋めたのが第三章附章の「ある蘭方医の薬箱に見る保存例」である。その基礎としたのは拙著『洪庵のくすり箱』（大阪大学出版会、初版二〇〇一年）、および拙稿「シーボルト記念館所蔵の点眼筐の調査報告」（『鳴滝紀要』第二二号、二〇〇二年）に掲載の記事であつて、それぞれを一部改変した。

それ以外の香薬について、関係する報告については各章末の注に記載したが、多くは新たに記載したものである。

本書には多くの理化学実験の結果やデータを記している。小生の研究室は小さく、設備や機器は豊かではなく、先端機器もない。それらを駆使して実験を進めてくれたのは研究室の教職員、そして大学院生や学部学生

の諸君である。そしてそれらは調査に関係した人々との討論の場へ移行した。度重ねて討論していただき、多  
大のご指導をいただいた正倉院事務所の歴代の所長、所員の方々には重ねて御礼を申し上げます。

本書を成すには以上のように多くの人々の協力を得てきた。全ての人の名を紹介し謝意を表すべきであろう  
が、正直なところ、遺漏なく記す自信はない。意をおくみいただきご寛容のほどをお願いしたい。感謝！

平成二十七年九月吉日

米田該典

- |                  |               |                 |  |
|------------------|---------------|-----------------|--|
| た行               |               | 『物類品隲』          | 376                                    |
| 『大安寺資財帳』         | 62            | 『風土記』           | 23                                     |
| 『第十一改正日本薬局方』     | 149           | 『文化財保存修復学雑誌』    | 373                                    |
| 『第十六改正日本薬局方』     | 248           | 『文化財をまもる』       | 373                                    |
| 『大宝律令 倉庫令』       | 341           | 『宝器主管目録』        | 285, 286                               |
| 『建部隆勝筆記』         | 88            | 『抱朴子』           | 300                                    |
| 『陀羅尼集経』 第四       | 116           | 『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』 | 65                                     |
| 『適々斎葉室膠柱方』       | 234, 247, 253 | 『法隆寺献物帳』        | 106                                    |
| 『天工開物』           | 194           | 『法隆寺資財帳』        | 62, 106                                |
| 『東大寺献物帳』         | 5, 107, 124   | 『法隆寺壁画保存調査報告書』  | 372                                    |
| 『東大寺三蔵御宝物御改之帳』   | 192           | 『本草経集注』         | 192                                    |
| 『東大寺正倉院開封記』      | 36, 78        | 『本草綱目』          | 163, 220                               |
| 『東大寺統要録』         | 341           | 『本草弁疑』          | 249                                    |
| 『東大寺勅封蔵見在納物勘検注文』 | 36            | 『本草和名』          | 23, 162, 191                           |
| 『東大寺要録』          | 4, 34         | 『本朝医談』          | 83                                     |
| 『唐大和上東征伝』        | 20, 62, 147   | ま行              |  |
| 『東南文書』           | 318           | 『枕草子』           | 132                                    |
| 『遁花秘訣』           | 240           | 『夢溪筆談』          | 300                                    |
| な行               |               | 『名医別録』          |  |
| 『内科秘録』           | 240           |                 | 105, 115, 117, 162, 191, 219, 286, 295 |
| 『奈良の筋道』          | 78, 79        | 『明治前日本薬物学史』     | 45                                     |
| 『南方草木状』          | 328           | 『基熙公記』          | 84                                     |
| 『日葡辞書』           | 236           | や・ら行            |  |
| 『日本書紀』           | 55, 70, 309   | 『薬品応手録』         | 258                                    |
| は行               |               | 『大和本草』          | 377                                    |
| 『博物誌』            | 122, 220      | 『雍州府志』          | 83                                     |
| 『福翁自伝』           | 244           | 『用薬便覧』          | 244                                    |
|                  |               | 『理化新説』          | 370                                    |

【書名】

あ行	
『医心方』	162, 191, 260
『伊東玄朴伝』	260
『医薬調剤古抄』	63
『瀛涯勝覧』	88
『江戸時代の科学』	262
『延喜式』	260, 306
『延喜式 染色令』	304
『遠西医方名物考』	239
『遠西方彙』	258
『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』	241
『お湯殿の上日記』	88
か行	
『海語』	88
『開宝本草』	219
『観古雑帖』	351
『魏志倭人伝』	309
『究理堂備用方府』	258
『杏林内省録』	236
『金匱要略』	116
『金銀精分』	370
『宮内庁蔵版 正倉院宝物』	37
「久保田・大宮 正倉院薬物整理始末書」	38
『外台秘要(方)』	116, 128, 130
『源氏物語』	125, 132
『建久目録』	115
『考古学・美術史の自然科学的研究』	374
『考古学と化学を結ぶ』	373
『考古学のための化学十章』	373
『甲子夜話』	270
『厚生新編』	238

『五十二病方』	317
『古文化財の科学』	46, 373
『古方薬品考』	249
『金光明経』	32, 209

さ行

『三法方典』	259
『三蔵宝物目録』	36
『七新薬』	244
「写章疏目録」	44
『袖珍薬説』	258
『傷寒論』	116, 199
『正倉院(一)』	46
『正倉院御物中之漢薬』	137
『正倉院御庫の漢薬と硝子並陶瓷』	39
『正倉院御物図録』	37
『正倉院御物棚別目録』 第二版	39
『正倉院御物中薬物之調査答申書』	46
「正倉院御物目録」	37, 284
「正倉院御宝物目録」	36
『正倉院の紙』	320
『正倉院文化』	42, 137
『正倉院宝库漢薬調査報告』	10, 39, 40, 356
「正倉院宝库の薬物」	138
『正倉院薬物』	3, 43, 45, 46, 84, 117, 138
「正倉院薬物第二次調査報告」	49, 15
「正倉院薬物の研究(中間報告)」	137
『正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究—正倉院の鉍物1—』	46
『証類本草』	219, 222, 286
『続日本紀』	22, 34, 338, 339
『新修本草』	43, 153, 156, 158, 163, 183, 204, 207, 219, 277, 286, 301
『神農本草経』	162, 191, 192, 199, 220
『神農本草経集注』	23, 43, 162, 219, 247
『図経本草』	162, 219
『図説 正倉院薬物』	3, 15, 37, 346
『星槎勝覧』	88
『舍密局開講の説』	370
『尺素往来』	88
『千金方』	128, 129
『千金翼方』	116

僧綱(東大寺三綱)	25
造東大寺司	25, 35
た行	
高田屋嘉兵衛	270
多紀元堅	272
滝精一	373
田中芳男	368~371
辻本謙之助	368
徳川家康	89
土肥慶蔵	39, 160
な行	
中尾万三	10, 14, 39~42, 50, 136, 137, 141, 155, 204, 206, 218, 222, 355, 363
中川五郎治	240
中村清二	373
難波恒雄	48
蛭川式胤	30, 37, 78
は行	
馬場貞由	240
土生玄昌	259, 266
土生玄碩	259, 266
浜田耕作	371
ハラタマ Gratama, Koenraad Wolter	368~371
日高涼台	244
平賀源内	376
福沢諭吉	244
藤田路一	177, 206, 217

藤原朝臣永手	18
藤原朝臣仲麻呂	18
穂井田忠友	351
ポードイン	
Bauduin, Anthonius Franciscus	368
菩提僊那	21, 22
堀川伊八	81
本間棗軒	240
ま行	
マキシモビッチ	
Maximowicz, Karl Johann	259
益富寿之助	45
町田久成	37, 80
松原行一	373
松浦静山	270
マンロー Munroe, Henry Smith	367
水谷豊文	259
水野瑞夫	48
三宅久雄	347
明治天皇	37
モース Morse, Edward Sylvester	367
モーニケ Mohnike, Otto	239, 241
森鷗外	38
森鹿三	43
や・ら・わ行	
山崎一雄	45, 373
横山松三郎	37
リッテル Ritter, Hermann	371
渡辺武	49, 124, 138

# 索引

## 【人名】

あ行	
相見則郎	47
朝比奈泰彦	42, 43, 137, 138
足利義政	82
市村塘	39
伊藤圭介	39, 160, 259
伊東玄朴	260, 267
伊東柴	260
伊藤昇迪	262, 264, 265~267
伊藤祐彦	262
稲生真履	81
宇田川榛斎	239
内田祥三	373
大槻玄沢	238
大宮武磨	38, 136, 155
緒方洪庵	231, 232, 234, 237, 239, 242, 244, 247, 249, 258, 266
緒方惟勝	237
岡西為人	44
小川劍三郎	268
奥山徹	47
小黑麻呂	25
織田信長	36, 82
臣萬朝臣福信	18
か行	
貝原益軒	377
加賀屋	241
	葛木連戸主 18
	加藤清正 88
	賀茂朝臣角足 18
	鑑真 19, 20
	岸本一郎 371
	木村康一 41~43, 49, 137, 141, 177, 217, 363
	木村法光 341
	久保田鼎 38, 39, 136, 155
	クラブロート Klapproth, Martin Heinrich 367
	呉秀三 258
	甲賀宣政 368
	光明皇太后 4, 18, 30
	近衛基熙 83
	木島正夫 47, 49, 140, 141, 153, 154, 157, 211, 217
	近藤真澄 372
	さ行
	佐久間象山 242
	サバチエ Savatier, Paul Ludovic 259
	シーボルト Siebold, Philipp Franz von 239, 256, 258~268
	ジェンナー Jenner, Edward 241
	鹿間時夫 45
	柴田桂太 373
	柴田承二 15, 45~47, 140~142, 161, 176, 186, 193, 202, 218, 221
	柴田雄次 373
	司馬凌 244
	清水藤太郎 218
	称徳天皇 165
	聖武天皇 4, 30, 138
	ゼルチュナー Sertürner, Friedrich Wilhelm 267